

天地

ネットワーク テーブル 472号

発行：天地シニアネットワーク：2018・6・1

TENTĪ TODAY			1
会員の広場	<80歳の爺>の意見 <日大・関学戦の審判団は何を見たのか>		2
連載作品			3
随想	天のわざ、地のほまれー地球を測れ、宇宙を測れ 47.コンデンサ（キャパシタ）について	伊那 闊歩	3
随筆	「1950年代の僕と街」（九） いたるところ職人芸の時代	臺 一郎	7
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語（45） 哲学の道・周山街道の古刹1「高尾の夏・神護寺」 （その2）	大竹 漢洲	9
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」		10
事務局			11

TENTĪ TODAY

米朝問題、イラン問題、イタリアの政情不安など、マイナス材料が続きますが、株式市場大暴落というようなショックもなく、日常生活はあまり変わらないようです。高齢者の生活がしにくくなり、国会の様子など見ても先行きにあまり期待が持てないようです。高齢者は、どうせ先は長くないのだから無理せず安定志向で行こうと諦めムードに陥りそうです。第三ラウンドもあり、というくらいの強い気持ちを持てるとよいのですが・・・。

今までもご紹介したことのある、徳島県吉野川市美郷の梅酒メーカー東野さんが、今年も立川の昭和記念公園で、1日～3日まで開催されるイベントに出店するため上京されます。東野さんは、定年退職後に郷里の梅農家を元気づけようと、梅酒の会社を8年ほど前に起業、退職後ですから、家庭用を拡大した程度の設備投資で、人は雇わず夫婦二人、ブランドを絞って高品質のものを高価格で売り、値引きはしない。販売は直販のみという手法で大成功、最近では、各地の展示会にも引っ張りだこ、東急ハンズでも扱われるようになったとのこと。大企業で培った経験と技術を生かし、誠実な人柄に加えて意欲と、心意気で人を引き付ける、退職後のシニアが、第二ラウンド迎える時のお手本です。

東野リキュール製造所のHPを是非ご覧ください。ご夫婦の素晴らしい笑顔が見られます。

会員の広場

＜ 80歳の爺＞の意見＞

大須賀 四郎

新聞、テレビなどいわゆるマスメディアは、日経と朝日を購読している。新聞がこのところやたらにページ数が増えて、紙が薄くなり紙質の劣化が目立つ。ページを読んで次のページに移るのに畳むのが難しいほどである。またやたらにページをフル使用した全ページを使っての広告・宣伝が目立つ。その宣伝もやたらにくどい説明が多い。企業が新聞社・広告会社に利用されているのに気づいていないようである。あまりごたごた述べた宣伝文など読む読者は少ない。少ない言葉でパンチのきく広告がよい広告なり。

電車で新聞を読んでいる人はほとんど見かけない。スマホの発達もあるがやたらに薄い、ページ数の多い新聞など電車などの中で読むのには全く適さないこともある。

テレビは、視聴者受けの番組が出るとすぐそれを真似したような番組を他のテレビ局が作り放送する。あきれ返るほどである。いわゆるモーニングショー、イブニングショー的番組にどうして金魚のウンチみたいに5-6人が並んで出てきているのかわからない。矢鱈にお金がかかるだけではないでしょうか。大したことをコメントしてくれるわけではないのに。コマーシャルが多すぎて煩わしいので極力民放は観ないようにしている。コマーシャルはテロップで流すようにすればどうでしょうか。

これは石川遼も数日前に新聞で述べていたが、ゴルフ中継、実際の試合が終わってから放送するケースが増えてきている。生放送こそ視聴者には魅力があるわけで、試合終了後にコマーシャルに優先権を与えているような放送姿勢は頭にくる。

NHKが自分の番組の宣伝に時間を使っているケースが目立つ。自己宣伝のために視聴料をお支払いしているつもりはない。

地デジ、BS, CSと数は増えているが放送会社側にそれに伴うコンテンツが伴っていないようである。やたらに放送権だけを確保しているだけのようにみえる。

日大・関学戦の審判団は何を見たのか

津田 孚人

日大アメフト部問題、日大だけが当事者となって報道されていますが、本質的なところで気になるのが、審判団です。報道では、問題のラフプレーに対して、最高のペナルティーを課して15ヤード罰退させたとありましたが、宮川選手は、このあとラフプレーを2回繰り返してから、退場を命ぜられています。しかしどう見ても決定的なのは相手をケガさせた最初のプレーです。テレビ画面では、そのとき、審判は、目の前ではっきり見ていました。なぜ、＜即退場＞としなかったのか、素人ながら不思議な気がするのです。少なくとも直接選手に注意してもよかったです。以上のことは、決して日大の監督、コーチを擁護するものではありません。以前から日本のスポーツ界には、審判軽視の風潮があり、その結果が、こういうところから出るのか

と思った次第です。

野球では、投手が打者に対して故意に危険球を投げれば、＜即退場＞でしょう。また、サッカーでも相手を傷つけるような故意のラフプレーは＜即退場＞を命ぜられています。スポーツは、危険と裏腹ですから、故意の危険プレーは、絶対に認められません。サッカーも同じと思いますが、野球界は、プロも、アマチュアも審判の能力向上、育成に熱心なように見受けられます。

全般的に日本のスポーツ界は、審判への評価が低く。選手の発掘、強化には関心があっても、審判の育成、強化にはほとんど関心がないように見受けられます。多くの競技で審判員に公認制度を設けているかと思いますが、専任は少なく、大体は元選手とか学生でみなアマチュアです。

アメフトのように選手の数が多く、動きが大きく、そして危険プレーがつきまとう競技では、審判が非常に重要で、数が多いようです。アメリカのプロの試合をみていると、審判の判定は絶対的のようで、危険について十分の配慮がなされているように見受けられます。片手間の、アマチュアの審判では、競技が成立しないくらいの話ではないでしょうか。

今回の審判団が、どのような経歴の持ち主で構成されていて、あのラフプレーにたいして、どのような判断をし、どのような評価をしたのか、一度は尋ねてみたいものです。危険な競技で、なおかつ強豪チームの対戦、それなりの審判が対応していたのでしょうか。一方では、審判団とし、選手、指導者への言い分があったかもしれません。

審判の重要性が認識されるときに、日本のスポーツ界は一段と強化されるにちがいありません。選手に目を向けるだけでなく、審判も非常に大事ということを知っておく必要があります。

このことは、スポーツの世界に限らず、世の中でも「自分たちだけに都合のよい勝手なプレーはしない、適正な判断力をもった審判団を養成して、その判断に従う」ということになり、かつてと同じ社会的通念ができて、将来への期待が醸し出されそうです。

連載作品

天のわざ、地のほまれ —地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

47. コンデンサ（キャパシタ）について

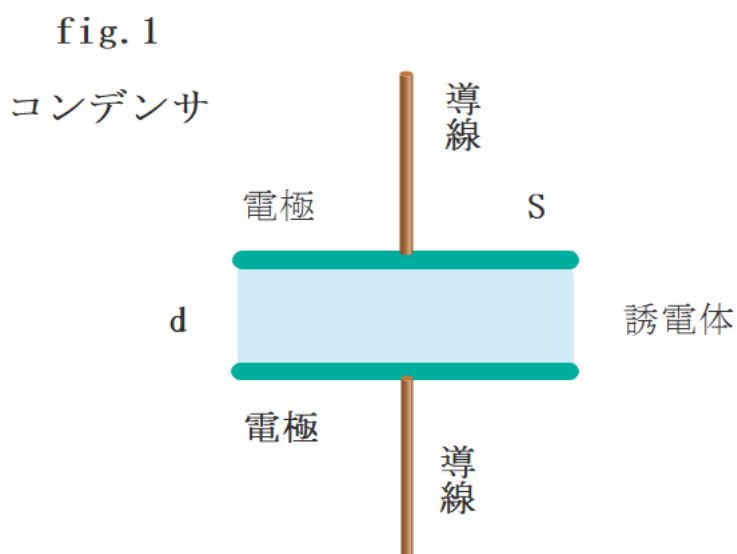
今回と次回は、家電製品の頭脳部分にあたる電気回路や電子回路を構成する重要な部品（素子という）を観察し、その仕組みと役割について調べよう。現在あまり見かけなくなったが、昔のラジオ受信機には真空管が使われていた。最も簡単な2極管は、内部を真空にしたガラス管の中にアノード（正極）とカソード（陰極）を封じ込め、カソードは電熱器のニクロム線のようなフィラメントで熱せられる。この2極管の端子の両端に（電熱線の電気とは別に）交流を流せば、熱せられたカソードに電子が溜まったとき、電子はカソードから飛び出してアノードに向かう。アノードに電子が溜まっても電子は飛び出しにくい。つまり、アノードからカソードへの電子の流れは阻止される。

こうして真空管の中では、カソードからアノードへの一方的な電子の流れが生ずる。電流の向きは電子の流れの向きとは逆であったから 2 極真空管は、交流を流してそれをアノードからカソードに流れる直流になおす「整流作用」があるのだ。

この 2 極管の役目を現在、ダイオードと呼ばれる半導体素子が担っている。3 極以上の真空管には、電流の増幅作用などが加わり、多機能を得て複雑になるが、それらは今やトランジスタや集積回路(IC)に置き換わっている。真空管は熱を発生し、熱は真空管劣化の原因になる。しかも小型化できない。そのため、最近では同じ役目を果たし、しかも小型で寿命のながいダイオード、トランジスタ、それらを組み合わせた IC チップなどが多く使われるようになった。小型卓上計算機などは、専用の小型 IC チップ(小さな半導体片の上に集積回路をつけたもの)によって、簡単に組み立てることが出来るようになった。

真空管や、ダイオード、トランジスタなど(集積回路 IC など)も電流の整流や信号の増幅などを行う素子(部品)を**能動素子**といい、一方、電力の消費、蓄積、放出のみに関与する素子、その代表的なものとしてコンデンサやコイル(インダクタ)、電気抵抗などは**受動素子**と呼ばれる。受動素子だけで組まれた回路を**電気回路**、これに能動素子も組み入れた回路を**電子回路**と呼ぶらしい(*1)。

今回は、受動素子のうち特に**コンデンサ**(英語圏ではキャパシタというほうが一般的)と呼ばれる部品の仕組みとその働きについて調べよう。コンデンサとは、電気(静電荷、静電エネルギー)を蓄えることができる素子で、fig.1 はその断面図である。薄い金属板(図の緑色)を 2 枚、隙間(間隔 = d)をあけて対面させ、その隙間に電流を通さない物質 = 絶縁体(空色の部分、誘電体ともいう)をはさむ(ただの空気だけのこともある)。金属板には導線が繋がれており、金属板が電極になっている。



導線の両端を電池につなげば、電流はコンデンサで遮断されているため流れない。電子たちは、ここで足止めを食い一方の電極に溜まる。電池の電圧が高ければ高いほど電子たちは電極部分に追いやられマイナスに帯電する。

もう一方の電極からは電子が逃げて行きプラスに帯電する。実は電極(の一方)にたまる電荷量 Q は、電極間の電位差 V に比例することがわかっている。この現象を**静電誘導**といい、その比例定数を C と書けば

$$Q = CV$$

と書ける。ここで比例定数 C を**電気容量 (静電容量)** といい：

「1クーロンの電気量を充電したとき、両極間に1ボルトの電位差を生じるコンデンサの静電容量を1ファラド (F , ファラッドとも) という」
(*2)

コンデンサの静電容量 C は、電極 (金属板) の面積 S が大きいほど大きく、電極間の隙間 d が狭いほど大きくなることがわかっている。数式で書けば

$$C = \frac{\epsilon S}{d}$$

となる。ここで ϵ (イプシロン) を**誘電率**という。真空の誘電率を ϵ_0 と書く (*3)。物質によってその値は変わる。チタン酸バリウムという人工鉱物 (セラミックス) の誘電率は空気の誘電率の 5000 倍もあって、それだけ多くの電気量を電極に溜め込むことができる。つまり、チタン酸バリウムを使えば小型で高性能のコンデンサを製造することができるのだ (*4)。

電気容量 C のコンデンサが電気量 Q に充電されるまでの仕事 W は

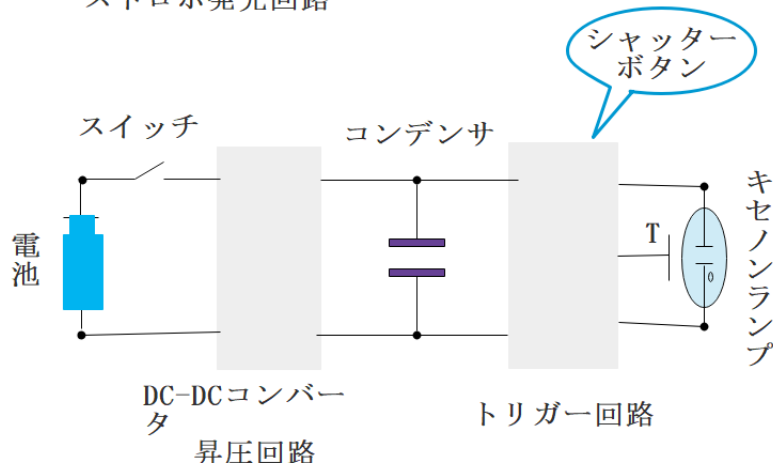
$$W = \frac{Q^2}{2C}$$

となる。

コンデンサが実際にどのように使われているか、カメラに内蔵されているフラッシュやストロボ装置を例にとってみよう。fig.2 がストロボ発光回路である。電池の電圧は数ボルトであるが、これを DC-DC (直流-直流) コンバータによって数百ボルトに上げる。スイッチを入れるとコンデンサ (小型大容量のコンデンサ) が充電される。このままではまだキセノンランプは発光しない。次にシャッターボタンを押せば、トリガー回路 (さらに昇圧する回路) が働いてトリガー電極 T がキセノンガスを刺激し、同時にコンデンサは一気に放電し、瞬間的に非常に短時間であるが、キセノンガスを発光させるのだ。

fig. 2

ストロボ発光回路



コンデンサは大きな電気量を瞬時に溜め込み瞬時に放電するので、ストロボ発光装置として使用することに適しているわけだ。電池ではこうはいかない。なお、トリガー回路にもコンデンサが組み込まれていて、これだけの装置が小さく折りたたまれ、カメラの他の部品の隙間に小さく収まっている。

電気回路にいろいろな電気抵抗を接続した場合、それらの合成抵抗を前回求めておいたが、今回はコンデンサ接続についての合成電気容量 C を与える公式を求めておこう。fig.3 は容量 C_1 , C_2 のコンデンサを直列に接続した回路を示す。このとき各コンデンサにかかる電圧を V_1 , V_2 とすれば $V_1 + V_2 = V$ である。 V は電池がつくりだす電位差である。またこの時、すべてのコンデンサに溜まる電気量 Q が同じになる： $Q = CV = V_1C_1 = V_2C_2$ 。これらの式から

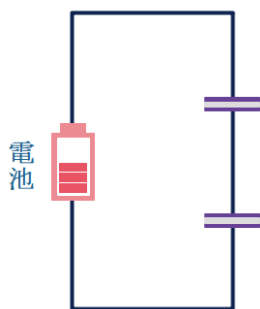
$$\frac{1}{C} = \frac{1}{C_1} + \frac{1}{C_2}$$

を得る。一方、並列の場合 (fig.4) 各コンデンサにかかる電圧 V は同じであるから合成容量は、各コンデンサの和になって

$$C = C_1 + C_2$$

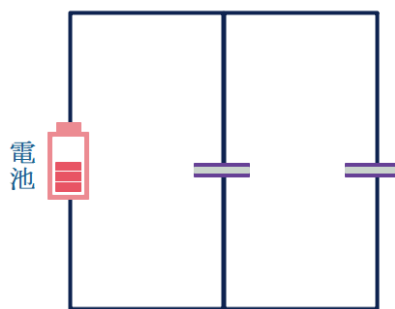
となる。これら合成容量の公式は電気抵抗の直列、並列接続の公式とは逆の関係になっていることに注意されたい。

fig. 3



直列接続

fig. 4



並列接続

コンデンサに直流をながせば、コンデンサは充電され電気の流れは遮断さ

れたのであるが、交流をながした場合、何が起こるか調べてみよう。交流とは時間的にその大きさや向きが（激しく）変わる電流である。コンデンサに溜まる電気量 Q とそれにかかる電圧 V の基本式： $Q = CV$ の両辺を時間 t で微分すると

$$\frac{dQ}{dt} = C \frac{dV}{dt}$$

となる。電荷の溜まっていく変化率は電流 I であるから： $I = dQ/dt$ なので

$$I = C \frac{dV}{dt}$$

を得る。直流の場合は電圧 V は変化しないので $dV/dt = 0$,ゆえに $I = 0$,電流は流れないのである。交流の場合、 dV/dt はゼロにはならず、その結果として電流の値もゼロにならず、コンデンサを通して交流は流れることがわかる。この電流は、絶縁体を通して流れているように見える。通常の銅線を通る電流とは違う（電流としての働きは全く同じ）のでこれを**変位電流**と呼んでいる。

(*1) 受動か能動かその区別はいまなお曖昧なところがある。たとえば、電池はどうみても能動素子であると思えるが、電池は受動素子に分類することもあるようだ。

(*2) 物理学辞典（培風館）の定義による。ファラド（F）はマイケル・ファラデーに因んで制定された組み立て単位である。絶縁体は直流を通すことはないので、電気とは関係ないものと思われるが、これがなかなか曲者であることをファラデーが発見した。1クーロンが落雷ほぼ1回に費やされる電気量であったから、1ファラドは、日常使う単位としては大きすぎる。日常的には、ファラドの百万分の1 = マイクロファラド（ μF ）またはその百万分の1 = ピコファラド（pF）を電気容量の単位としてつかっている。なお、ファラドを組み立て単位として書けば

$$[F] = kg^{-1} \cdot m^{-2} \cdot A^2 \cdot s^4$$

となる。なお、人体にも電気を溜め込む能力があり、その容量は10pFほどであるという。

(*3) $\epsilon_0 = 8.85 \times 10^{-12}$ [F/m]。誘電率の真空のそれとの比 ϵ / ϵ_0 を比誘電率という。以下に物質の比誘電率を理科年表から抜き書きすると、空気：1.0005, パラフィン：2.2 ボール紙：3.2, 雲母：7.0, チタン酸バリウム：5000

(*4) コンデンサは電気を（大量に）溜めこむことが出来る素子なので蓄電器と呼ばれていたが、それでは蓄電池（バッテリー）とどう違うのであろうか。関係式： $Q = CV$ からすぐわかるようにコンデンサは電圧をかけることによって作動するのであって、電圧がゼロになれば、蓄えた電気量はたちまちゼロになる。コンデンサにはそれを働かせる電源が必要であるが、一方バッテリーは自分自身で電気エネルギーを生み出すことができるのだ。

随筆風「1950年代の僕と街」（九） 臺 一郎

いたるところ職人芸の時代

僕がまだ小学生や中学生の頃のこと。いろいろな分野で、職人達が手作り

や手作業で建物や製品を作り、或いは加工していた。そこには、今はもう殆ど見られなくなった素晴らしい職人芸の数々が輝きを放っていた。

職人芸という言葉から僕がすぐに思いつくのは、家造りなどにおける大工の腕や技だ。昭和 30 年頃の大工は、電動工具などは使わず、伝統的な手作業用の工具を使って仕事をしていた。大工は各種の角材や板材を材木屋から調達し、鋸（ノコギリ）や鉋（カンナ）や鑿（ノミ）などの道具を使って長さや厚みや表面を整え、柱や根太や床板などに加工し、それらを組み立てて家の骨格を造り上げた。まだ 2×4（ツー・バイ・フォー）工法なんてなかったから全てが在来工法。工事現場が好きだった僕は、近くで新築住宅の建設が始まるとよく現場に行った。

大工の技で「凄いな」と感心したものの一つは、板材の表面を仕上げる鉋（カンナ）掛けだ。大工は、片目をつぶって鉋の刃の飛び出し具合を金槌で軽く叩きながら微調整する。それから鉋の刃を板材の表面に押し付け、一気に手前に引いていく。すると、材木の薄い削り屑がまるで紙テープのように繋がって鉋から出ていく。ベテランの大工だと、長さが 5m はありそうな板材の端から端を、透き通るように薄い削り屑をしばしば途切らせることなく鉋で削ってみせた。

作業は単純だが「さすがはプロ」と思わせるのが大工の釘打ちだ。小さな釘だと 10 本くらいを口の中に入れて、一本ずつ口から出して指で摘まみ、板や角材に素早く正確に打ちつけていく。子供心に口の中に釘が刺さらないだろうか、うっかり飲み込まないだろうかと心配した。素人は一本の釘を板や柱に打ち込むのに、下手をすると釘を 10 回以上も金槌で叩く。本職の大工はせいぜい 4~5 回でしっかりと打ち込む。そして釘を曲げるなどの打ち損じはまずしない。

左官屋の作業もプロの技や腕が光る仕事だ。土壁塗り、モルタル塗り、コンクリートの直押さえなどの仕事だ。コテをまるで氷上のスケーターが滑るようになめらかに動かし土壁などを仕上げている。塗りは薄く均等で、表面は平滑そのものだ。壁を塗るだけの仕事なのだが、プロとして通用するには標準的な腕で 5~7 年、師匠レベルだと 10 年以上の修業が必要だという。

ところで一般的には職人芸として認識されていないものの中にも、今思うと『あれは職人芸だった』と思えるものがある。例えば鉄道駅の出札や改札の仕事。自動券売機などがまだ殆どなかった昭和 30 年代前半のことだ。お客が出札窓口で『どこそこ、大人 2 枚子供 3 枚』などと言うと、厚く硬い紙の切符が金額別や行き先別に何十種類もセットされた乗車券箱という設備から、該当する切符を必要な枚数だけ瞬時に引き抜き、切符の端に印字機でカチャカチャと日付を印字する。代金を暗算や手元の算盤で素早く計算してお客に伝え、金を受け取り、つり銭が必要なら瞬時に計算して、つり銭と切符をお客に渡す。これらの一連の動作を猛スピードで行う。ノンビリやっていたのでは、お客が予定の列車に乗り遅れる可能性があるし、窓口の前には客がすぐに溜まってしまうからだ。また、各駅の改札では駅員が乗客から渡された切符に、その駅固有の凸とか凹とか M 字などの形の切れ込みを鋏でパチンと入れる。これが実に早い。ベテランだと 1 秒間になんと 2.5 人の切符に鋏を入れたという。お客が定期券を見せながら改札を通る際には、期間や区間が有効かを一瞥で確認して、期間が無効な客やキセル乗車疑いの客は引き留める。改札から出る客についても定期券をチェックし、使用済み切符

を回収しなければならない。それでいてキセル客や期限切れの定期券は滅多に見逃さない。職人芸と言って良いだろう。

ところで、この 30 年くらいの間に、様々な分野で日本の職人芸は確実に無くなってきた。それは、日本が世界有数のモノづくり国家としての地位を失っていく時期とほぼ重なっている。少子化が進み、若者が職人の厳しい修業を嫌うようになったことも一因だろう。道具類の電動化や知能化、全自動機やロボットの導入、高性能パソコンの活用等が急速に進んだという状況も大きそうだ。

ベテラン職人の腕や技で実現してきた優れた製品品質、サービス品質、仕上げ等が、電動工具や全自動機やロボットでも実現できるとなれば、必然的に職人芸を強みとしてきた国の競争力や存在価値は低下していく。日本人としては寂しいことだけれど、それが文明の進歩や発達というものなのだろう。
(この項終わり)

＜そうだ京へ行こう・古刹の花物語＞（４５）

大竹漢洲

哲学の道・ 周山街道の古制 1・高尾の夏・神護寺

(471号につづく)

岡山街道のバス停「山城高雄」で下車すると、空気が爽やかで、風に杉の香が漂ってきます。清滝川に架かる橋を渡り、杉林の道を 1k m²ほど歩くと、長い石段の下に至ります。この石段の上が神護寺の境内です。一步一步と急勾配の石段を踏みしめて上りました。神護寺は高雄山の中腹にある山岳寺院です。かつて、悦子の両親と訪れたことを急な石段に歩を運びながら思い出しました。その前夜、麩屋町の「俵屋」に宿を取っていました。夕食を囲んでいる時、義父が、突然明日は神護寺に行ってみたいと言い出したことを覚えていてます。高齢で心配した記憶もあります。今、旅人は義父に近い年齢になります。並んで隣を歩く義父の息遣いが聞こえてくるようです。暑い盛りの夏の京でした。神護寺は山の冷気に包まれて清々しく、暑い記憶は希薄です。

参道の下から見上げると、長い石段と上に楼門が仁王立ちしてます。仁王門です。両脇に持国天・増長天の二天像が安置されています。楼門をくぐると、山腹を平に整地した広場になります。広場の右側には書院・和気清麿呂霊廟・鐘楼・明王堂が建ち、その先に五大堂と毘沙門堂が南向きに位置しています。毘沙門堂の後ろには太子堂が、そして五大堂の北側の階段を上った先に本堂、即ち金堂が配置されています。金堂の裏手に神護寺の一番高所に多宝塔が、境内全体を見下ろすように建てられていました。

多宝塔が金堂より一段と高い所に位置しているのは、各堂宇が深山に建立される真言密教伽藍の基本構造に基づいています。神護寺を囲む全山は青葉の季節を迎えて、境内は異なった緑色のグラデーションで染まっていました。秋の紅葉の時期は、さぞかし美しい光景を目にすることができるでしょう。

神護寺は、東寺や高野山金剛峰寺とともに、真言密教の寺院として、幾多の

歴史を持った名刹だけに、蔵する仏像群も奈良時代から平安時代初期の造作仏が多く安置されています。赤い柱が林立する内陣の堂宇が本堂です。本堂は金堂とも呼ばれ、内陣の須弥壇には、ご本尊薬師如来坐像が祀られています。この仏像は山寺の特徴である神仏習合思想を背景にして、一般的な「慈悲相」と異なった異相をした薬師如来です。頭部から蓮台座まで檜の一木造りです。造作当初に着色された跡が部分的に残っています。唇は紅のようです。衣紋線が左右対称に美しく浮き出て表現されています。奈良時代の仏像です。

薬師如来の余談です。

薬師如来は「薬師経」に説かれている東方の浄瑠璃世界の教主であり、当初菩薩であったときに、自ら12大願を發願して成就して如来となりました。衆生の病苦を救い、無明の病疾を癒すという如来です。左に日光菩薩、右に月光菩薩の脇侍と十二神将を眷属としています。神護寺の金堂には更に、左右端には如来を護る四天王が安置されています。普通の薬師如来は、左手に薬壺を持っています。仏教發祥の地インドの北部一部に遣る程度で、仏教が東漸するに連れて、中国、日本で發展して信仰の対象となりました。

毘沙門堂は五大堂の南に建ち、入母屋造りの五間堂です。かつては金堂として用いられ、薬師如来坐像も毘沙門堂に安置されていましたし、今日は、厨子に納められた毘沙門天像が安置されているので、名称が毘沙門に変わりました。

太子堂には珍しい彫刻が遺されています。開祖弘法大師空海を板に立体的に彫り上げた「板彫り弘法大師」が太子堂のご本尊です。彫刻以上立体感があり、当時と弘法大師のお姿を正確に写してあり、彫刻師の技量の高さが感じられます。色を施した跡が見えます。金堂の薬師如来坐像と同様肩の紅色が鮮やかでした。多宝塔には、五大虚空菩薩坐像が安置されています。密教の仏像は、没個性の表情をしています。仏像美術の先生は、曇荼羅の世界と仏として、しかも群像の一であると理由を説明しています。

五大虚空菩薩の余談です。五大虚空菩薩は保持している「徳」或いは「知」を五方に分けた五尊の総称です。東方の福智(金剛)は、金剛杵で煩惱を砕き消滅させる仏です。南方の能滿(宝光)は、蓄積されて計り知れない福德を待っている仏です。西方の施願(蓮華)は、蓮華をかかげて人の心を本来は正常であるように導く仏です。北方の無垢(業用)は、無限の知恵を持ち計り知れない徳を説く仏で、中央の解脱(法界)は、人の求める福德を表し福德を与える仏です。この五体が五大虚空菩薩坐像で木彫の上に部分的に乾漆を用いて、柔和な表情をだすために盛り上げる技法で造形されています。心が安らぐ仏様です。

空海の弟子であった真済が、神護寺経営を引き継いで、この多宝塔を建立しました。五大虚空菩薩坐像が五体ともにご本尊です。かつては中央に解脱像を安置、残りの四体は四方に配置されていました。義父と多宝塔まで上り、広縁に腰かけて、谷から吹き上げる風に一時の清涼を楽しんだ記憶が蘇ってきました。義父は神護寺が気に入っていました。間もなく故人になりましたが、魂は神護寺に生きています。魂は神護寺に生きています。

神護寺境内の西端に立つと、眼下に清滝川が流れ、高雄から清滝を風光明媚な溪谷が続きます。風流人たちは、秋の清滝川を「錦雲溪」と称して愛で

てきました。今は真夏、溪谷から吹き上がる谷風に涼しさを感じます。秋の深まる10月中旬を迎える頃には、溪谷全体が極彩色に染まり、溪谷は名の通り「錦雲溪」の人智の及ばない美しい浄土の世界になるでしょう。

神護寺を後にして岡山街道を北に高山寺に向かいました。

文化講座・講演会

奈良興福寺文化講座 2018年6月21日(木曜日)

午後5時半～6時半：第一講「300年ぶりの興福寺中金堂」

興福寺境内整備委員会座長 鈴木嘉吉

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：(学)文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

(JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分)

第95回 新三木会講演会のご案内

1、日時・会場 2018年6月21日(木) 13:00-15:00 如水会館

2、講師・演題 『中国の科学技術振興について』

沖村憲樹氏 技術振興機構顧問(元理事長)

3. 申込・会費 E/Mail: shinsanmokukai@gmail.com

Tel: 047-464-4063

フルネーム: 一般・天地シニアネットワーク

会費: 2000円 婦人 1000円 学生無料

茶話会: 15:15-14:20 千円 (自由参加)

4. ホームページ

<http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

5. 予告

7月19日(木) 第96回 『アメリカと中国の長い歴史』

松尾文男氏 ジャーナリスト・元共同通信常務取締役

事務局

<事務所移転しました>

<投稿歓迎> <図書のおすすめ依頼>

<プリント版・郵送>

メール版(無料)を月に一回編集してプリント版を発行郵送しています。お申込みくだされば送ります。その際には、実費として1月350円(4200円/年)をいただいておりますのでご了承ください。

<振込先> 振込先：三井住友銀行「神田支店」 （普通） 7 8 7 1 5 3 2
（口座名） テンチシニアネットワーク

天地シニアネットワーク・テーブル・472号

発行：2018年6月1日

天地シニアネットワーク事務局 （津田 孚人）

住所：〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX・03-3819-7651

携帯電話(津田)：090-2534-1316